

図3-2-4. 被害規模ランク図 (マンホールふた) (S=1/35,000)

凡例	
記号	ランク
●	ランク3 (特定緊急輸送路下)
●	ランク2 (一般緊急輸送路下)
●	ランク1 (その他)

3-3. 不具合の発生確率の検討

発生確率（不具合の起こりやすさ）の検討では、リスクの発生確率を算定する。評価方法については、ストックガイドラインを参照し、以下の方法が考えられる。

1) 経過年数による評価

経過年数により不具合の起こりやすい施設を整理

2) 清掃・巡視・苦情などの結果から得られた情報や経験者への確認による評価

清掃・巡視・苦情などの結果得られた情報や経験者への確認により、不具合の起こりやすい地区や施設を整理

3) 健全率予測式による評価

国土技術政策総合研究所の公開データ等を使用した健全率予測式により、不具合の起こりやすい施設を絞り込む

4) 簡易な現地調査による評価

マンホール目視調査（鏡など）、管口テレビカメラ調査、テレビカメラ調査（側視なし）、その他新技術（展開テレビカメラ、浮遊式カメラなど）といった簡易調査によるスクリーニングを実施することや、巡視・清掃による施設状況の情報などを活用し、不具合が発生している可能性がある施設を絞り込む

ストックマネジメントの導入当初においては、経過年数による簡易な方法により評価し、将来的には、点検・調査結果などのデータが蓄積された段階で詳細な検討を行うなど、検討方法をレベルアップさせることが望ましい。これらの方法は、一つの方法に限定するものではなく、組み合わせて検討を行うことも有効である。

(1) 管きよの不具合の発生確率

本実施方針においては、ストックマネジメントの導入時であること、また、詳細な検討を行うためのデータの蓄積が十分ではないことから、管きよの不具合の発生確率（不具合の起こりやすさ）の検討は、経過年数による評価とし、経過年数別にグループ化してランク付けを行った。また、管種により劣化傾向が異なることから、管種を考慮したグループ分けを行った。

同環境下にある場合、経過年数が長いほど劣化の傾向が高い。また、コンクリート系管きよおよびレンガの管は、その他の管（主に塩ビ管）に比べて劣化傾向が高いと判断し、不具合の起こりやすさのランクを管種別の経過年数によって設定した。

また、経過年数のレンジは5年*を最小単位とし、あきる野市の施設分布（図 3-3-1）によりランクごとのボリュームの偏りが大きくなるように設定した。（※「下水道維持管理指針 実務編 -2014年版-」より、「管きよの対応が必要な劣化状態：緊急度Ⅱ」相当の場合、対応期限が5年以内であるため）

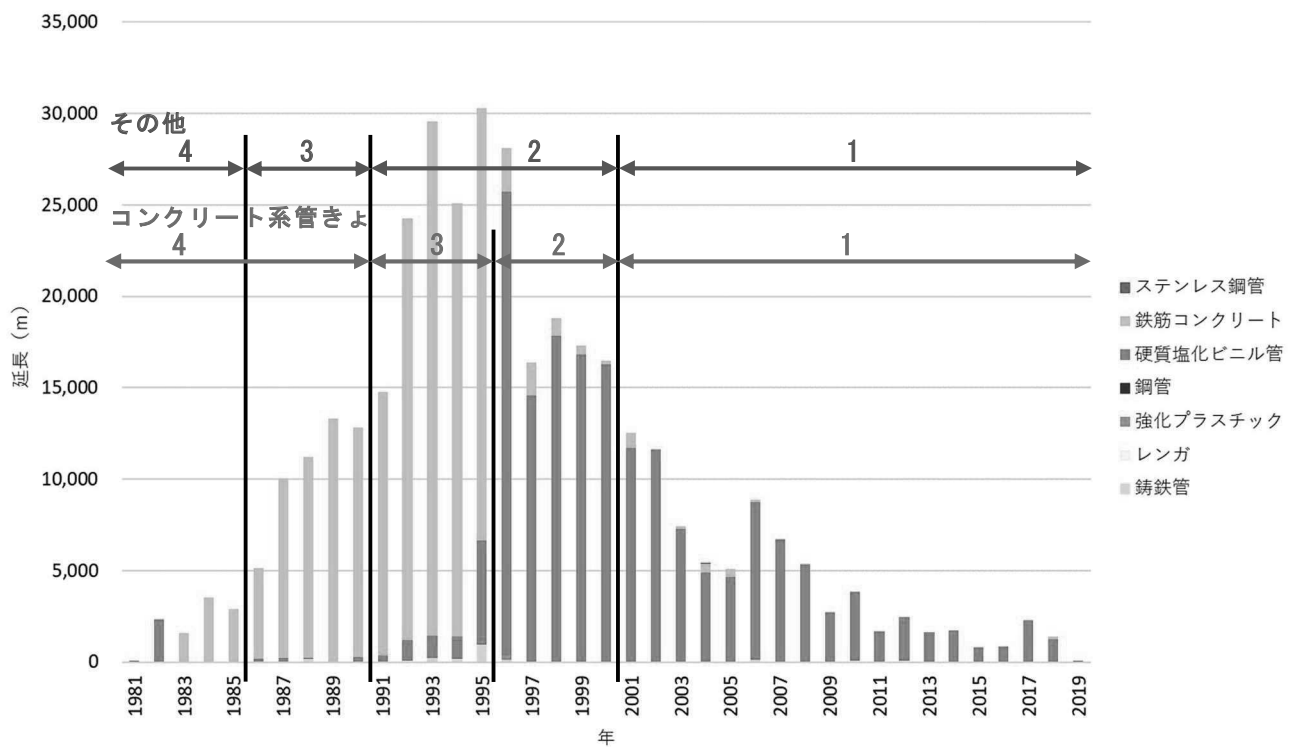


図 3-3-1. 発生確率ランクの設定（施工年度分布図）